

東京外国語大学イタリア語科卒業。テレビ映像制作会社経営、マンション管理に従事。現在無職。

「私はまだ^{こうれいしゃ}孝齡者」

小学校卒業以来四十何年目だかの同窓会だったから、みんな六十に近かった。今度は何時やろうか、という事になって、そりゃあ還暦同窓会でいこうやと決まった。そしてその日、いつもの顔ぶれに二人が欠けた寂しさがあったが、ほとんどが変わらない姿を見せ合った。「六十は人生の折り返し点」などと意気軒昂だった。やがて多くが六十五で定年。暇ができた奴から、外国旅行の葉書が届いたりしていたが、七十歳になるとさすが音信が遠のいた。

私は七十二歳までマンションの管理人をしていたので、旅行に出かけるゆとりは無かった。退職して、いざ時間だけはたっぷり出来たものの、今度は金のゆとりが無い。

マンション管理の現場で培った経験を生かして、なにかやれないかと考えていたら、マンション管理士の国家資格をとったらどうだと、もと勤務先の管理組合の理事長さんがヒントを下さった。そのマンションでは日頃の勤務を評価してくれて、幸い居住者の皆さんにも親しんで頂いていたので、新しい後任者が馴染むまで教育かたがた出向いて欲しいと望まれた。自主管理をしているのならとにかく、管理を委託している管理会社に厳しく注文をするのが先決だ。一般的なチェックは経験上の知識があれば、別に管理士の資格なんか無くても出来る。時代の要求などと謳っているが、意欲的な理事長さんがいれば大した出番は無い。中途半端な資格だと思った。

七十を過ぎてても、その後の同窓生の訃報に接することが無い。みんな長生きしている。

それどころか、母が百歳になった。申し訳ないことだが、経済的な事情で姉に面倒を見て貰っている。「私自身がもう介護が欲しい歳になったのに」と嘆かれて、慙愧の思いに打ちひしがれた。そこへもってきてこの夏、家内が硬膜下血腫で手術をし

て、退院後の介護にヘトヘトになった。マンションの管理より、マンションでの介護問題に切実感を持った。近所に大学院の建築学科を出たお嬢さんがいて、「建築現場はやはり男の世界で、自分の出る幕がない気がする」と弱気で悩んでいた。考えた末、同じ建築関係の分野で働ける福祉住環境コーディネーターの資格をとってみると言う。それこそ私の取り組むべき分野ではないか。要項を教えてもらい、一緒に受験勉強に励んだ。

そもそも高齢者とは何か。抱えている社会問題。病気、介護、その施設、要員、手続きから、バリアフリー、車椅子、ベッド、リフト……。いやあ、勉強になった。国が制度を考え、手を打ってくれていることに多少安心した。そして、自分を始め知識の乏しい人の多いことに驚いた。

試験場には若い人が沢山いた。日本の若者も捨てたもんじゃないと頼もしくも感じた。年配の人結構いた。みんな真剣だった。

二級に合格した！しかし、さすがに七十三歳では職場は歓迎はしてはくれないだろうなあとは気が重かった。ところが、人材派遣の仕事で成功して手広く事業展開をしている後輩が、「会社を創ったらいかがですか。資金は出しますよ。人材をまとめるのがお上手だから、若い資格者のマネジメントをなさればいい」と、お上手を言う。会社経営はまた別の能力だし、ちょっとしんどいなあ。第一、管理人の仕事が始めたのも、もともと自分の会社を倒産させた結果でありますから……。

建築学修士のお嬢さんが目を輝かせて、協力を申し出てくれた。今度は一級に挑戦することになった。

おい、同窓の友よ、ひょっとしたら、君らの介護の相談に乗れるようになるかも知れんぞ。その前に、もうすぐ百一歳になる母を看取りたい。私はまだ「孝齡者」^{こうれいしゃ}でいなければならん。超高齢者社会を支えて頑張ろう。